報道関係者各位

2019年6月11日

発行：ヒッポファミリークラブ広報室
TEL:03-5467-7041
MAIL: kouhou@lexhippo.gr.jp

ヒッポファミリークラブ　News Letter 2019 vol. 2

多言語教育を提唱するヒッポファミリークラブから、
多言語の習得や関連する研究、グローバル人材が育つ環境など、さまざまなトピックをお届けします！

- **10代の出国数10年前の2割増、「日本の若者は内向き」のウソ？ホント？**
- **小5が一人で海外へ！？　初めてのホームステイ体験、父と娘のエピソード**
- **脳の発達期における海外留学の意義　東京大学教授　酒井　邦嘉（言語脳科学）**
- **夏の多言語関連イベント情報**

10代の出国数10年前の2割増、「日本の若者は内向き」のウソ？ホント？

日本の若者は諸外国と比べて内向き－急速なグローバル化に直面する機会が身の回りで増えたいっぽうで、世の中にはそんなイメージが定着しているのではないでしょうか？

インバウンド（訪日外国人旅行）活況の陰に隠れてあまり注目されないものの、最近は日本人の出国者数にも大きな変化が出てきているようです。日本政府観光局（JNTO）の統計によると、2018年の出国日本人数は1,895万4,000人で、2012年（1,849万657人）の記録を上回り、過去最多となりました。そのなかでも近年、特に増加が目立つのは10～19歳で、2017年の出国者数は10年前（2007年）と比べ23%のプラス※となっています。

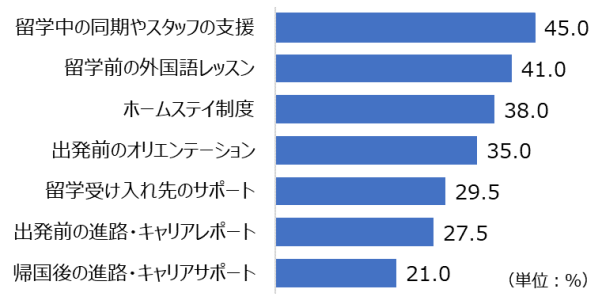
※法務省「出入国管理統計」をもとにヒッポファミリークラブで推計

2007年→2017年・出国日本人数の推移

年齢	2007年	2017年	
	出国日本人数（単位：千人）		増減率
0～9歳	552	641	＋16%
10～19歳	835	1,029	＋23%
20～29歳	2,824	3,045	＋8%
30～39歳	3,669	3,122	－15%
40～49歳	3,216	3,661	＋14%
50～59歳	3,175	3,200	＋1%
60～69歳	2,257	2,231	－1%
70歳以上	766	960	＋25%
総数	17,295	17,889	＋3%

今年1月に公表された、日本学生支援機構（JASSO）の「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」によると、2017年度は前年度比8.7%増の10万5,301人の大学生などが海外へ留学したとのことです。これらの結果だけを見る限り、今どきの日本の若者は必ずしも「内向き」とは言い切れないようです。

留学支援へのニーズ



2018年10月19～22日　ヒッポファミリークラブが実施したWEB調査より
対象：海外留学に興味がある全国の高校生と大学生200人

留学への不安97%、継続的な周囲の支えを希求

昨年10月、ヒッポファミリークラブが海外留学に興味がある全国の高校生と大学生200人に行ったWEB調査では、回答者の96.5%が海外留学に関して何等かの不安を持っているという結果が出ました。留学支援へのニーズでは、全体の45%が「留学中の同期やスタッフの支援」と回答し、「留学前の外国語レッスン」（41%）を上回りました。また、38%の学生が「ホームステイ制度」にも興味を持っています。留学先の言語や学校の授業などに関する事前準備とあわせ、留学期間中の継続的なサポートや精神的な支えも必要とされていることがうかがえます。

感受性が豊かで考え方も柔軟な若い時期に海外で多様な文化や価値観に触れることが、国際社会を生き抜く力を養うという点からも貴重な経験となることは間違いありません。私たちはこれからも、世界を目指す若者達のがんばりを応援していきたいと考えています。

小5が一人で海外へ！？　初めてのホームステイ体験、父と娘のエピソード

ヒッポファミリークラブは多言語教育の一環として、海外でのホームステイを通じた国際交流を推進しています。小学5年生から大学生までを対象としたプログラムでは、春休みと夏休み期間中の2週間～1ヵ月にかけて、年間約1,500人の少年少女達が、海外の家庭に一人でホームステイをして現地の生活を体験しています。出発前の準備から帰国後の報告まで、仲間達と取り組み共有することで、現地での経験がさらに深まります。

娘のロシア交流で考えたこと　　父：大野 泰平さん（55歳・会社員）

2017年の夏休み、当時、小5の娘が2週間のホームステイでロシアに旅立った。ロシア人と家族になるというプログラムだ。ホストとはもちろん面識はなく、ロシア語も挨拶程度。心配の種と成長への期待の中、元気に出発した。ホームステイの準備はその1年前から始まった。外国の異なる文化の人々と互いに理解し合うために、世界の中の日本と自分について親や地域の仲間と一緒に考えていく。それは親にも得難い体験だった。
それだけ準備しても本番では予想もしないことが起こった。

ふたを開ければ娘は前半の1週間はホームシックで泣いていたという。受け入れ家族だけではなく、スタッフにも非常に心配をかけた。ところが1週間も泣くと、泣く理由がよくわからなくなったそうだ。急にポジティブになってロシアを楽しまなくちゃ損だと思ったとか。親から見ると自力で立ち直った経験が貴重だと思う。本人も物凄い自信につながったという。とにかく娘は驚くほど元気に帰ってきてほっとした。

そしてホームステイは帰国してからがまた凄かった。
娘には翌日から何度も何度も体験報告の場が設けられた。するとその度に新しい話が出てくる。話し方も瞬く間に要点が整理され、こなれていく。報告は2年近くたった今でも続いていて、未だに初めての話が飛び出すのには驚かされる。

娘が出発前、親としては実りある旅をして欲しいと思っていた。しかし、報告を繰り返す姿を見て考え方がまるで変わった。子どもたちは親から離れ、見知らぬ土地で様々な経験をしてくる。それを繰り返し話すことが重要なのだ。彼らは話す度に、嫌でも年齢相応の価値観で自分の体験を見つめ直す。そこに新たな発見と成長がある。
ロシアから帰ってきてから娘の話す力は飛躍的に発達した。彼女は大勢の人の前で堂々と体験談を語り、時には進行役もする。それはロシアで得たものを一つ一つ確かめているように見える。

今年の夏には１ヶ月のアメリカ交流に行く娘。今度はどんな成長を見せてくれるのか？毎日、ワクワクしながら見守っている。

2週間のロシア交流で得たもの　　娘：大野 唯菜さん（12歳・中学1年生）

ロシアのホームステイは何の迷いもなく決めました。
ロシア語は話せないので不安も多少あったけど家族と仲良くなれたらそれでいいって、ポジティブに考えて出発しました。

でもロシアに着いたらひどいホームシックになりました。文化が違うと知ってたけど実際に体験すると、日本と違いすぎてすごいショック。生のロシアに超驚いて混乱した。
日本の仲間と離れてホストの家に着いた頃には不安しかなくて泣きだしたらとめられなかった。ホスト家族にもすごく心配をかけました。でも、1週間で立ち直ることができて、後はポジティブにロシアを楽しめました。

仲良しのみんなで誕生会（前列右が唯菜さん）

私はこの経験でコミュニケーション力が高くなったと感じてます。以前は大人と話す時など気をつかって緊張してた。でも、ロシアでは全然知らない大人に何度も話しかけられました。そしたら言葉が通じなくても話さなくちゃいけない。気を遣うどころではなく、とにかく自分の思っていることを伝えるだけで精一杯。それと比べたら、日本語で話すなんてなんでもない。どんな世代の人とでも自然に話せるようになったと思います。

今年の夏にはアメリカに行きます。ホームシックは少し心配。でも、ロシアの経験があるから、知らないところでも絶対になんとかなる自信があります。英語は話せませんが、ぺらぺらになって行くより面白い発見ができると思っています。

成長期における海外留学体験について、言語脳科学の専門家にうかがいました。

脳の発達期における海外留学の意義

東京大学教授　酒井　邦嘉（言語脳科学）

1964年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1996年マサチューセッツ工科大学客員研究員を経て、2012年より東京大学大学院教授。言語という究極の難問に脳科学の視点から挑んでいる。著書に『言語の脳科学』『科学者という仕事』（ともに中公新書）、『脳の言語地図』（明治書院）、『芸術を創る脳』（東京大学出版会）など。 2019年4月には、新刊書籍『チョムスキーと言語脳科学』（集英社インターナショナル）が発行された。

海外留学の体験が生涯の財産となることに異論はないであろうが、成長期にある十代での海外留学、特に小中学生の単身ホームステイや高校生の長期留学が、日本での教育を上回るほどの意義や効果があるかどうかが問題となろう。海外留学では、留学後に自分の殻を脱して積極的に周りとかかわれるようになった、という他では得がたい体験を多く耳にする。ここでは、さらに脳科学と第二言語習得の観点から検討してみたい。

十代は、知識形成や人格形成の上で極めて重要な時期であるばかりでなく、脳の急速な発達期でもある。その過程では、外界に適応するように大脳や小脳の神経回路が形成される。この十代の高い適応力に比べれば、成人した後の能力はおおむね限定的であり、個人差が大きくなると考えられている。

また、英語習得に関する調査や実験によれば、第二言語の平均的な成績は、その言語に触れ始めた年齢が十代の前半である場合から、十代の後半以降である場合にかけて、減少傾向にあることが知られている。純粋に語学留学という観点からすれば、十代前半に英語などに触れることによって、より大きな定着効果が期待できると言えよう。ただし上記の体験のように、留学の効用は語学だけに限定されるものではない。

国際的な教育機関であるEducation First社（EF）が実施した2018年のアンケート（対象は学生と社会人を含む）によれば、留学前に「語学力の向上」をイメージしている人が最も多く、六割程度であった（複数項目より一つのみ選択）。ところが留学後に実感した経験では、語学力の向上を挙げた人が二割以下と大きく減り、逆に「未知の世界・異文化への理解、好奇心」と「グローバルな交友関係・人間関係」という項目を挙げた人が、それぞれ三割を超えた。これは、海外留学の体験が各人の志向を大きく広げうることを示しており、興味深い。

誤解がないように補足すると、十代の前半から始めないと英語が身に付かないというわけではないし、語学に海外留学が必須ということでもない。正しく言えば、いかなる第二言語の習得に対しても海外留学は有効なのだ。また、一つの言語がうまくなると、別の言語も同時に連動して上達することが起こりうる。これらの原因は言語が本来もつ普遍性にあり、言語機能が人間の脳の生得的な性質に由来するためである。この点については、最近の著書『チョムスキーと言語脳科学』（集英社インターナショナル）で詳しく解説したので、参照していただきたい。

日本人大学生の場合、半年未満の短期留学は増加傾向にあるが、長期留学にあまり変化はない（日本学生支援機構の調査結果による）。もし、十代の長期留学によって世界に対する目が開かれるなら、文部科学省が目標として掲げる「グローバル人材の育成」、すなわち「語学力のみならず、相互理解や価値創造力、社会貢献意識など」に資することは確かであろう。

夏の多言語関連イベント情報

グローバル人材を育てる多言語教育について理解を深めていただくため、さまざまなイベントを開催しています。

昨年夏、世界に旅立った高校生約110人が集結、1年間の海外体験をプレゼン
2018年度 海外高等学校交換留学 帰国生による体験報告会

日時：7月7日（日）10：30～12：30（開場10：00）
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟　大ホール（東京都渋谷区代々木神園町3-1）

ヒッポファミリークラブの海外高等学校交換留学プログラムでは、高校生が約1年間、海外の家庭にホームステイをしながら現地の高校で学びます。1997年の開始以来、21の国や地域に約2,000人の高校生を送り出しています。海外体験に挑戦したいという高校生の志をヒッポファミリークラブが全面的に支援し、一緒に留学する仲間たちと共に準備を進めることで連帯感が生まれ、毎年、ほぼ100%の学生がそれぞれの留学期間を満了して帰国しています。

2018年は夏112人、冬11人の計123人が、アメリカ、カナダ、イタリア、スペインなど、世界10ヵ国に旅立ちました。夏出発組は5月下旬から順次帰国し、7月上旬までに参加者全員が留学の全日程を終了し日本に戻る予定です。

毎年7月に開催される夏出発組によるこの報告会は、海外留学を終えた帰国間もない高校生が一堂に会して2泊3日の合宿を行い、その最終日に開催されます。司会進行、留学国別のチームによるパフォーマンス、海外体験のプレゼンテーション、報告会の最後に流れるスライド作成まで、全てを自分たちで企画・実施します。家族への感謝や自分自身の成長など、若者達の瑞々しい感性で語られる話の数々は、毎回参加者に大きな感動を与えています。

ことば・文化・世代の壁を越え約350人が斑尾高原に集合、自然体験が絆を深める国際交流プログラム
第5回 多言語ネイチャーキャンプ

日程：7月27日（土）～7月30日（火）　3泊4日
場所：長野県飯山市／斑尾高原
　　まだらお高原　山の家（長野県飯山市斑尾高原11492-70）　ほか

赤ちゃんからシニアまで、日本に住む外国人や海外からの参加者も交えた約350人が集う、毎夏恒例の国際交流プログラムを今年も開催します。第5回目となる今回は、中国・広東省の中学校と高校から約75人が参加予定です。

2019年夏 海外高等学校交換留学の受け入れ開始　日本のホストファミリーと初対面

〈来日関連イベント〉

8月20日（火）	終日	順次日本到着、空港でホストファミリーと初対面
8月23日（金）	10：30～13：00	来日オリエンテーション　於：ヒッポファミリークラブ本部（東京都渋谷区渋谷2-2-10）

韓国、イタリア、メキシコ、タイ、アメリカの高校生17人が来日。日本の家庭で1年間ホームステイをしながら各地の高校に通います。来日オリエンテーションでは、関東以外でホームステイをする留学生と各地のホストファミリーとの初顔合わせ、留学生本人による抱負や1年後に描く自分の姿についての発表、日本の生活習慣や学校生活のルールについての説明などが行われます。

上記のイベントは当日のご見学やご取材も可能です。ご希望の際は下記担当までお知らせください

ヒッポファミリークラブ　広報室　TEL:03-5467-7041（代表電話のため受付は平日9：00～17：30となります。あらかじめご了承ください）
FAX:03-5467-7040　MAIL:kouhou@lexhippo.gr.jp